

「肥のみらい」はシートマルチ栽培によりさらに高品質な果実が生産できる

「肥のみらい」は、透湿性シートを被覆し、11月に収穫すると、浮き皮発生が少なく、中玉果率の高い高品質な果実を生産できる。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室(担当者:北園邦弥)

研究のねらい

「白川」の枝変わりの珠心胚実生から選抜・育成した「肥のみらい」は、「白川」より連年結果性が高く、着色は早く、果実品質も良好で熟期も早いため、年内出荷が可能である。

しかしながら、導入されて間もないため、安定して高品質果実を生産できるか不明である。

そこで、透湿性シートのマルチ栽培(以下、マルチ栽培)により、品種特性を活かしつつ、高品質果実を生産できる技術を開発する。

研究の成果

1. 「肥のみらい」は、10月上旬から着色を開始し、11月上旬にはほぼ完着となる(表1)。
2. 果実の浮き皮は、11月上旬から発生し始め、無マルチ栽培に比べ、マルチ栽培での発生は少ないが、12月上旬にはクラッキングが発生(達観)してくる(表2)。
3. マルチ栽培の果実は、無マルチ栽培に比べ糖度が高く、クエン酸はやや高い(図1)。11月に入るとマルチ栽培の果実糖度(Brix)は13以上となり、それ以降も徐々に増加する。クエン酸は11月中は1%程度であるが、12月に入ると1%以下になる(図2)。
4. マルチ栽培の果実階級は、無マルチ栽培に比べ、大玉果率(2L級果以上)が低く、M・L級の中玉果率が高い(図3)。

普及上の留意点

1. 透湿性シートは8月上旬被覆、エチクロゼートは7月下旬に1回目を散布し、天候や果実品質を考慮し、必要に応じて2回目を散布する。
2. 夏秋期に降雨が少なく土壌乾燥が続き、果実の小玉果や酸高が懸念される場合には、かん水を実施する。
3. 収穫が遅れると果実体質が弱くなるため、クラッキングの発生がみられる場合には収穫を早める。
4. 摘果は、上向きで表層に着果した果実を中心に摘果し、下垂した枝や葉裏に隠れた果実を残すと浮き皮発生は少ない。

表1 「肥のみらい」の着色程度別割合(平成21年)

月/日	着色程度別割合(%)				
	2分以下	3~4	5~6	7~8	9分以上
10/5	93.0	7.0	0.0	0.0	0.0
10/12	78.5	18.5	3.0	0.0	0.0
10/19	28.5	38.0	21.5	8.0	4.0
10/27	10.0	14.0	15.5	29.5	31.0
11/5	0.0	1.0	2.0	8.5	88.5
11/12	0.0	0.0	0.0	1.0	99.0
11/16	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0

注)マルチ栽培は平成21年7月30日開始

表2 「肥のみらい」の浮き皮程度と着色歩合の推移(平成20年)

区分	調査月日	浮き皮程度(%)				浮き皮 指数	着色 歩合
		無	軽	中	甚		
マルチ	10月30日	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.5
	11月6日	98.5	1.5	0.0	0.0	0.5	9.9
	11月17日	96.0	4.0	0.0	0.0	1.3	10
	11月26日	93.5	6.5	0.0	0.0	2.2	10
	12月3日	90.0	9.5	0.5	0.0	3.5	10
無マルチ	10月30日	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.6
	11月6日	95.5	4.5	0.0	0.0	1.5	9.9
	11月17日	92.5	7.0	0.5	0.0	2.7	10
	11月26日	82.5	16.0	1.5	0.0	6.3	10
	12月3日	73.8	22.7	3.0	0.5	10.1	10

注1) 浮き皮指数 = $\frac{\text{軽} \times 1 + \text{中} \times 2 + \text{甚} \times 3}{\text{調査果数} \times 3} \times 100$

2) 平成20年8月2日にマルチ、無マルチともエチクロゼー H100ppm散布

3) マルチ栽培は平成20年8月4日開始

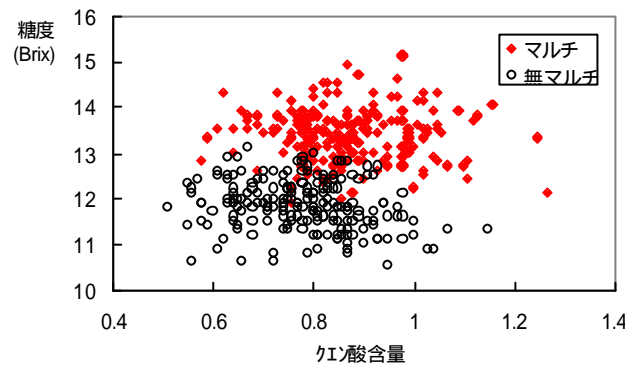


図1 「肥のみらい」の糖酸分布(平成20年)

注) 赤道部の果実50果/樹×4樹、平成20年12月2日収穫、4日調査

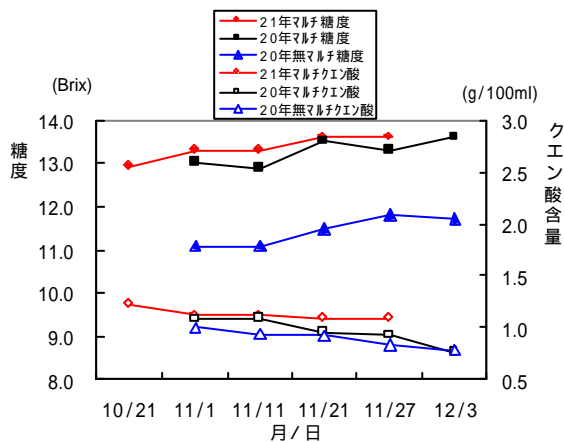


図2 「肥のみらい」のマルチ栽培による果実品質の推移

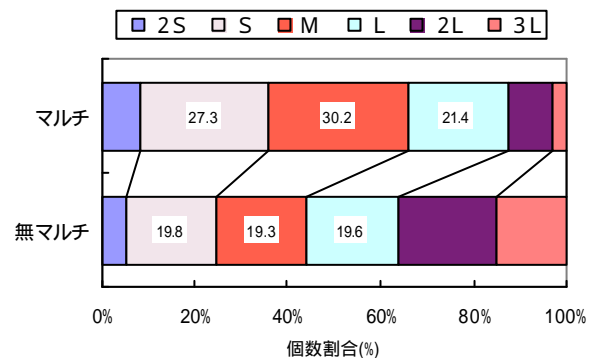


図3 「肥のみらい」の階級比率(平成19年、20年の2カ年平均)